函館市の七夕行事「ローソクもらい」の実態

山崎　福太郎

Ⅰ．はじめに

北海道では七夕に子ども達が中心となってローソクもらいと呼ばれる行事がおこなわれている．ローソクもらいとは，数人の子ども達が七夕の夕方に集まり，女児や幼児は浴衣姿で提灯を，男児は缶灯籠（かんどうろう）などを片手に「竹に短冊七夕祭り　オーイヤイヤヨ　ローソク一本ちょうだいな」などと囃し唄を歌いながら，近隣の家々をまわってローソクやお菓子をもらい歩く習俗である．近年はローソクではなく，お菓子や玩具を用意してあることの方が多く，少子化や安全上の理由により行われていない地域もある．しかし，囃し唄の内容などに地域差はあるが，ローソクもらいの習俗は出身母村や移住形態の相違を越えて，北海道の各地域に分布している．また，北海道以外では秋田県に「七夕さまのおくねりだ　ローソク一本ちょうだいな」（『北海道の年中行事』小田嶋政子），新潟県中条町村松浜に「竹にたんざく　七夕様よ　ローソクだせだせよ　ださねどかっちゃくぞ（ひっかくぞ）ワーワーワー」というような囃し唄の存在が確認されている．

函館市では7月7日に行う年中行事の一つとして定着し，他地域より盛んな活動が見られる．しかし，なぜ函館市においてローソクもらいが現在まで盛んに継続されてきているか，その実態に焦点を当てた研究は見当たらない．そこで『函館市史』や「北海道新聞」等の既存研究資料や住民からの聞き取り・アンケート調査などから，函館市におけるローソクもらいの由来や変遷を明らかにし，かつ現在の実態や住民たちが持つ意識について考察する．

Ⅱ．調査方法と対象地域

今回は既存文献資料調査と函館市民へのアンケート調査，聞き取り調査を行った．文献資料は函館市中央図書館，信州大学教育学部図書館に所蔵されている書籍を参考にした．アンケート調査の対象地域は①函館山の麓に位置し，町内に歴史あるキリスト教会や旧公会堂がある元町②市の中心地域に位置し，函館市役所がある東雲（しのめ）町③市中心部から北東方向約4kmの郊外に位置し，町内に五稜郭を有する五稜郭町④五稜郭町とそれに隣接する梁川町に住む児童が通う市立千代田小学校6年1組とした(図1).

図1　調査対象地域

これら地域の選定理由として，①の元町は函館市成立当初から町を形成している伝統的地域であり，昔から続く様子を調査するためである．②の東雲町は函館駅や市役所周辺の市中心部の様子を調査するため，③の五稜郭町は郊外の五稜郭周辺に住む高齢者層の住民の意識を調査するためである．④の千代田小学校はローソクもらいの行事の当事者である子ども達の実態を調査するためである．また，アンケート調査地域と同じ地域で聞き取り調査を行い，元町，東雲

町，五稜郭町においては各町会の町会長，副町会長の方々を中心に，千代田小学校では宗像英明教頭先生にお話をうかがうことができた.

Ⅲ．資料・聞き取り調査

ローソクもらいのルーツ

ローソクもらいの由来として，江戸時代後期の函館市にはネブタを引いて通りを練り歩く祭事が存在したことが，函館開港当時の資料「松前紀行」に記されている.

「ねぶたを持もあり、綱を曳も有て、二十人、三十人も揃ひ、色々の囃子を同音に謡ひつれて歩く形勢、勇ましくも愛らし此囃子先句は百般なれ共、ただヲヲイヤイヤヨと云なり。」

「ネブタ」とは，眠り流しといって秋口に農作業の妨げとなる睡魔を払い流すための行事のことで,「眠たい流し」から出た語である．七夕行事のひとつで，藁で作った船形・灯籠・人形や飾り竹などを川や海に流すことが一般的である． 東北地方で現在も盛んに行われており，今では灯籠が大型の飾り灯籠となっている．このネブタに灯すローソクを集め歩くのが子ども達の役目であり，大ネブタを曳くかけ声の「オーイヤ　イヤーヨ」が現在にも残る「竹に短冊七夕祭り･･･」の囃し唄の中に残されている. また,「函館風俗書」にはローソクをもらい集めている様子は記されてないが，灯籠を見せて歩く様が記載されている．これは青森県下北半島において「ねぶたッコ見てくれ」と，子ども達がねぶたを見せて回って歩く習俗があり，これと類似している.

「七夕祭と相唱ひ、寺子や子供等の者より銘々額燈籠差出、竹に五色短冊結付、前日より子供等師匠々々え集り、太鼓・笛打ならし、町々囃子立押歩行、今昼頃右燈籠海岸より相流し候仕来りに御座候。」

これらの資料から読み取った内容を踏まえると，ローソクもらいは本州（特に青森県下北半島付近）で行われていたネブタ文化が津軽海峡を渡って北海道に入り込み，七夕祭りと混交して行われるようになった結果，成立した習俗であると推察できる．特に近世以前より本州とのつながりが強かった函館では他地域より根強く今日まで続く行事として定着したのだと考えられる.

また，北海道全域においてローソクもらいを行う七夕は旧暦（8 月 7 日）に行うことが主なのだが，函館市は新暦（7 月 7 日）を採用している．これは，8 月に函館市内で最も盛大な行事の一つである函館八幡宮例大祭が行われていたことから，これを避ける形をとったとされる（北海道新聞，1992）．函館がネブタ文化を取り入れる際に元来ある行事とうまく共存を図るために日程をずらしてでも行おうとしたところから，ネブタ（ローソクもらい）が年中行事として重要視されていたことがうかがえる.

Ⅳ．アンケート調査

函館市内におけるローソクもらいの現在，過去の実態と住民の方達が抱く意識を明らかにするため，函館市内 3 町会と 1 市立小学校にアンケート調査を実施した. 調査概要は表 1 に示す.

表 1　調査概要

調査タイトル：ローソクもらいに関する実態調査アンケート
調査対象：元町町会役員のみなさん，東雲町会のみなさん，五稜郭町会のみなさん，市立千代田小学校の 6 年 1 組のみなさん
配布回収方法：3 つの町会と町会長，千代田小学校の教頭先生に全面的な協力を得ることができたため，町会や学校を通じた配布回収とした.

設問は函館市での居住歴，ローソクもらいの実施の有無，持ち物や衣装，時間帯や囃し唄の内容などについて設定した. 取得データは表2に，アンケート本文は文末に示す.

表２　アンケート調査用紙配布回収枚数と回収率

配布数	234 枚
回収数	99 枚
回収率	42.3%
元町町会役員	50%(8/16)枚
東雲町会	28%(28/100)枚
五稜郭町会	47%(47/100)枚
千代田小６年１組	100%(16/16)枚

Ｖ．アンケート結果

全体と町会，小学校ごとのアンケート結果について分析をする.

Ｖ－１　回答者の属性

回答していただいた方の年齢層は 19 歳以下が 22 人，20 歳～39 歳は最も少なく 3 人，40～59 歳が 29 人，60～79 歳の人が 38 人，80 歳以上の人が 5 名であった（図 3）．現在ローソクもらいを行っている家庭は 34 人，一方過去（回答者からの聞き取り内容やアンケート用紙に記述されていた記述中の過去を示す年代を検討すると 25~30 年前のことを示していることから，ここでいう過去とは 25~30 年前とする）に行っていたとの回答は 53 人となった（図 4）．このことから調査対象地域は高齢者層の多い地域となる.

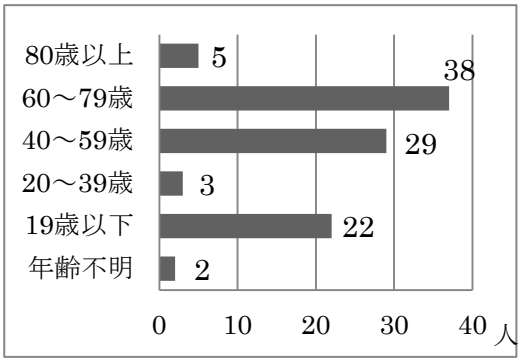

図３　回答者の年齢別構成

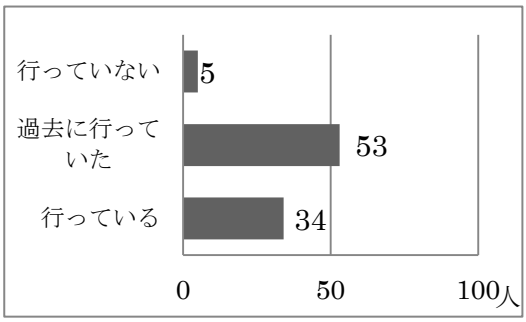

図４　ローソクもらいの実施状況全体

Ｖ－２　元町町会の現状

函館の町が成立当初からある元町町会では，役員の８名にアンケートを実施した.

そのうち６名（女性４名，男性２名）が現在もローソクもらいの行事に参加している．元町町会で参加している６人は，まず居住歴が親や祖父母の代からが６名中５名であった．昔からこの土地に住む人が比較的多い可能性がある．ローソクもらいを行っている年齢層を見てみると，3 歳以下の幼児であっても保護者同伴で行事に参加している（図 5）.

実施は 15 時頃のまだ明るい時間帯に行われていることが読み取れる（図 6）．また貰うものは，現在はローソクよりもお菓子が主であるが，お菓子とローソクを同時に渡すことがある．持ち物はほとんどの子ども達がお菓子を入れる袋を持ち歩いている姿が見られる．移動範囲は町内域外へ出ていく場合が多い．囃し唄について基本は「大いに祝おう（オーイニイワオウ）」で

あり，多少のばらつきが見られたが，それらはここに「ローソクけなきゃ（くれなければ）かっちゃくぞー」という文句が付されるものであった．

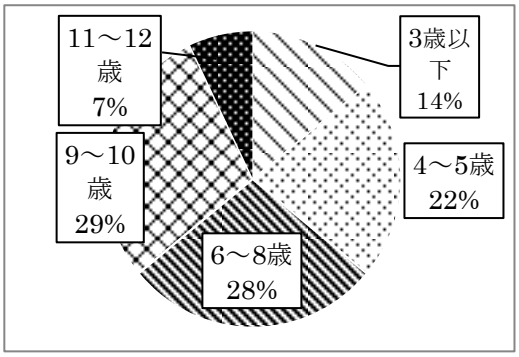

図 5　元町：ローソクもらい参加者の年齢

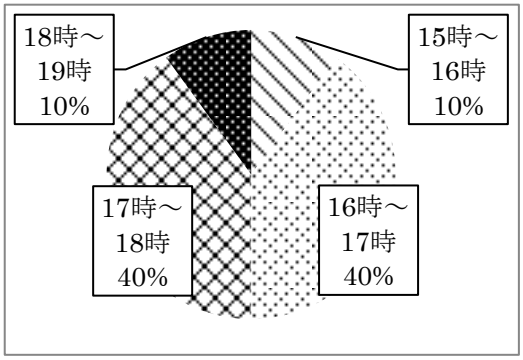

図 6　元町：実施時間別割合

Ｖ－3　東雲町会の現在と過去の様子

東雲町会では，28 名（男性 17 名，女性 11 名）からアンケートの回答を得た．回答者の半数以上にあたる 15 名が 60 歳以上であり，過去にローソクもらいを行っていた方が 22 名であった．現在の実施年齢別割合は 4～5 歳が 22%，就学期と重なる 6～8 歳が 26%，9～10 歳が 26%，11～12 歳が 26%となっている．また現在の実施時間別割合は 16 時～17 時が 30%，17 時～18 時が 35%，18 時～19 時が 35%である．この町会では現在と過去とでは貰うものに差が見られた．過去では 20 名がローソクをあげていた一方で，現在ではローソクとお菓子が 6 名ずつとなっている（図 7）．

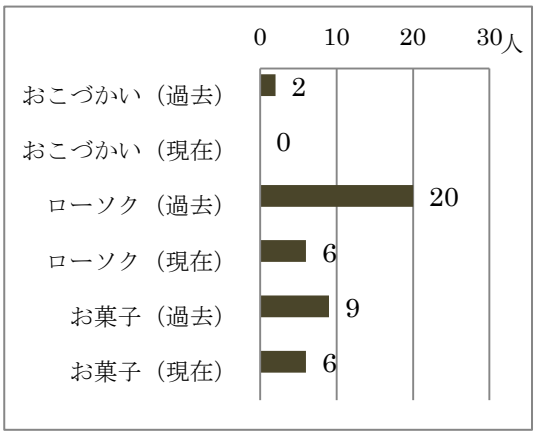

図 7　東雲町：貰うもの（過去と現在）（複数回答）

また，現在提灯を持って歩く子どもは 5 名だが，缶灯籠を持つ子どもは現在 1 人も見受けられない．袋については過去も現在も共通して見られる姿であった（図 8）．

移動範囲は過去には町会域内に限られる一方で，現在はほとんどが町会域外へ足を運んでいる（図 9）．手に持つものは，空き缶を用いて手作りする缶灯籠からスーパーなどで販売している提灯やもらったものを入れる袋などへと移り変わった．囃し唄については，「多いは嫌よ（オーイヤイヤヨ）」と解釈して捉えていたが，現在では「大いに祝おう（オーイニイワオウ）」とかつてとは違う意味で捉えている様子が見られた．

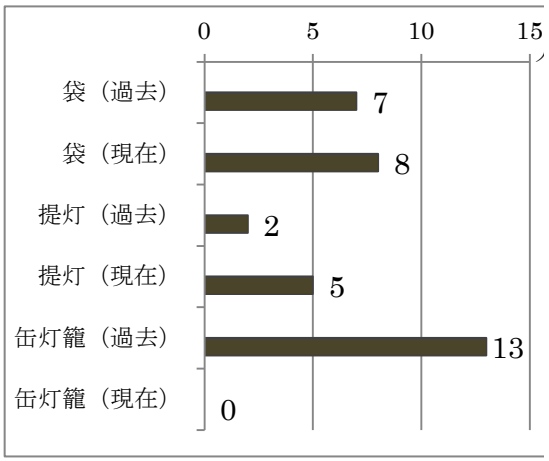

図 8　東雲町：持ち物（過去と現在）（複数回答）

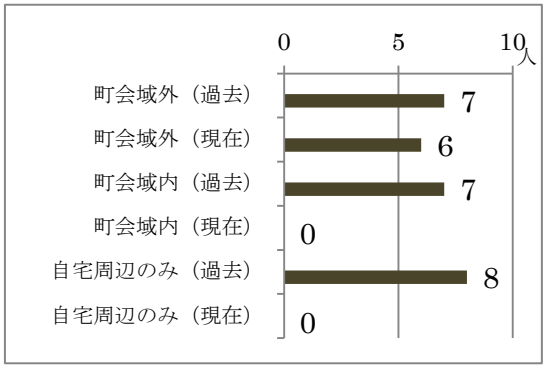

図 9　東雲町：移動範囲（過去と現在）

Ｖ―5　五稜郭町会の現在と過去の様子

函館市郊外に位置する五稜郭町会では 47 名（男性 12 名，女性 35 名）から回答を得た．年齢層で一番多かったのは 40～59 歳で 20 名であった．この地域も比較的高齢者が多く，昔は行っていたとの回答は 72%である（図 10）．五稜郭町での現在の実施年齢は就学期の児童達が多く参加している（図 11）．

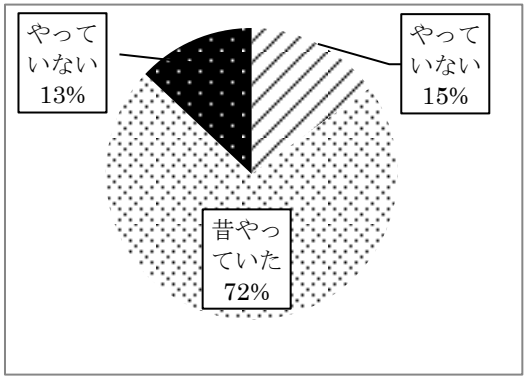

図 10　五稜郭町：実施割合

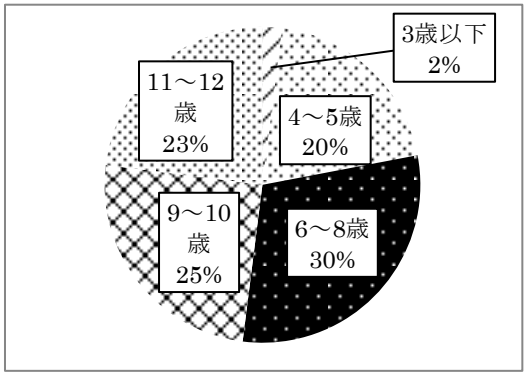

図 11　五稜郭町：実施年齢別割合

実施時間帯は 15 時以前が 2%，16～17 時が 6%, 17 時～18 時が 43%, 18 時～19 時が 31%, 19～20 時は 18%であった．また貰うものについて過去はろうそくとお菓子が基本であったが，現在はお菓子が主流である．手に持って歩くものは提灯や缶灯籠が少なくなり，その代りにお菓子を入れるための袋を持参する姿が多くなった（図 12）．移動範囲は町内会域内から，現在は町内という範囲を意識しない移動の様子が見られる．囃し唄は 24 人が「大いに祝おう（オーイニイワオウ）」と解釈しており，4 人が「多いは嫌よ（オーイヤイヤヨ）」，3 人が他の町会では見られない「ローソク出ーせー出ーせーよー出ーさーなーいーとーひっかくぞーおーまーけーにーかっちゃくぞー」という結果が見られた．

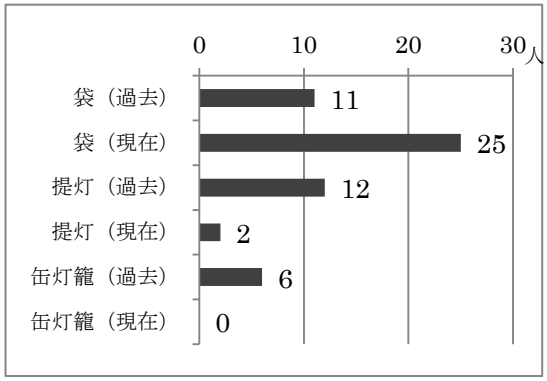

図 12　五稜郭町：持ち物（過去と現在）（複数回答）

Ｖ－5　現代の子ども達の実態

函館市立千代田小学校（2011 年 9 月 28 日現在，全校児童 134 名）の 6 年生 16 名（男子 8 名，女子 8 名）から回答を得た．まず実施時間帯は全員が 18～20 時の間であった．貰うものはお菓子が中心だが，ほぼ同数ローソクも貰っている（図 13）．現在では小学校からの指導で笹飾りを出す家や商店しか訪問してはいけないルールがあり，それを知った上で行動している．持ち物は，ビニール袋 16 名，その他（リュック）

3 名などである（図 14）．また服装は 14 名が洋服で浴衣は 2 名である（図 15）．行動範囲は町会域外まで出ていく児童が 11 名と多数を占める．囃し唄の解釈については全員が「竹に短冊七夕祭り　大いに祝おう　ローソク一本ちょうだいな」としていた．

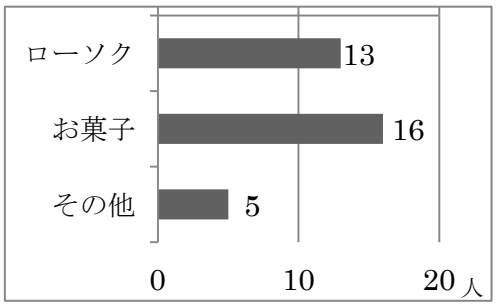

図 13　千代田小：貰うもの（複数回答）

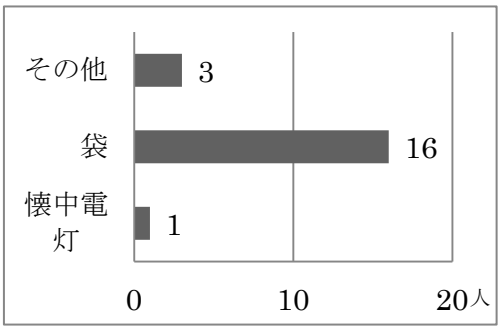

図 14　千代田小：持ち物（複数回答）

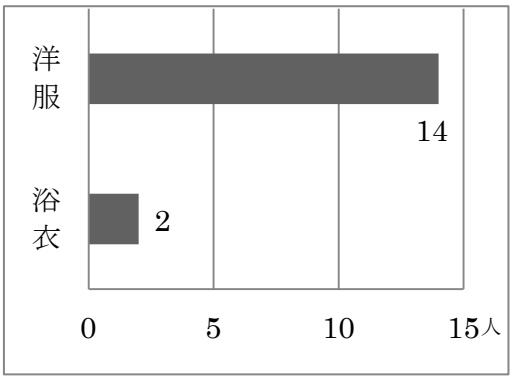

図 15　千代田小：服装

Ⅵ．アンケート調査にみられる各町内の傾向

Ⅵ－1　元町のローソクもらいの姿

元町町会においては，回答数が少なく，全体の傾向を把握することは難しいが，明るい時間帯に行われているのは子ども達の安全性を考えてのことなのだと考えられる．元町は教会群や旧公会堂などの歴史的建物が残る古い町であるため，ローソクからお菓子へと渡すものが変化したことを意識して両方とも渡すようにしている姿があるのではないか．

Ⅵ－2　函館市中心部にある東雲町の様子

東雲町における回答者の半数以上にあたる 15 名が 60 歳以上であることから，東雲町は市役所が立地する市の中心地であるため，ドーナツ化現象と少子化などの影響によって人口が少なくなり，多くの高齢者が居住している地域と言える．現在はローソクとお菓子をあげる人が半々の値を示すことから，それだけお菓子を与えることが一般的になっていることが読み取れる．また現在ほとんどの子どもたちが町会域外へ足を運ぶようになったのは，商店でもお菓子をあげるようになり，それを求め，移動範囲が広がったと考えられる．手に持つものがもらったものを入れる袋が増えていることから，お菓子もらいの傾向が強くなってきていることが見受けられる．そして囃し唄に関しては，過去と現在では違う意味で捉えている様子が見られたのは，時間が経つにつれて囃し唄の文句を理解しやすいように解釈してきたものだと考えることができる．

Ⅵ－3　五稜郭町の過去と現在の様子の違い

五稜郭町も比較的高齢者が多い町であった．ローソクからお菓子へと渡すものが変わってきたのはローソク自体の需要と子ども達が火を扱

う危険性を考えた結果なのだろう．持ち物では缶灯籠を持つ姿は見られなくなり，提灯も持って歩く子どもは少なくなった．一方では，貰ったお菓子などをいれておく袋を持参する姿が多くみられるようになってきた．これはローソクもらいが“お菓子もらい”の姿に変わってきたからであろう．住民達の間では袋を持って歩きまわっている様子は良い格好ではないと受け止めている人も少なくない．

Ⅵ－4　現代の子ども達のローソクもらい

千代田小学校においては，ローソクもお菓子と一緒に貰っている様子が見受けられ，ローソクもらいという行事をきちんと残していこうとする地域住民の姿勢を読み取ることができる．行動範囲は町会域外まで出ていく児童が見られるため，児童達は町会の範囲は意識せず，学校区を意識して移動しているのだと考えられる．小学校からの指導があるので，笹飾りを出している家や商店だけを訪問することや，囃し唄を統一して歌っている姿がみられることから学校が与える影大きいといえる．

Ⅵ－5　全体を通して

現在は25～30年前のように浴衣姿や提灯，缶灯籠を手に持って歩く姿はあまり見受けられないが，子ども達は幼いころから身近にある年に一回の楽しみとして受け止めていることが推察される．また地域の大人達は，ローソクが姿を消してしまっていることを憂慮し，お菓子ばかりでなくローソクも渡していることから次の世代やその後の世代にもローソクをあげる・もらうことを大切にしていってもらいたい気持ちを読み取ることができる．学校も児童への指導を行い，良い伝統として残していくための取り組みがなされている．どの町会においてもローソクもらいの“ローソク”をあげることを大切にしていきたいという姿勢はアンケート結果から見えてくるが，子ども達が主役となる行事であるのでお菓子を渡すことが多くなってきているのが現実である．ローソクを活用することができるような提案や取り組みを町会や学校，市が率先して行うということもローソクもらいが今後も函館市に残るよりよい行事として継続されていくひとつの方向であると考える．

Ⅵ．まとめ

本調査では江戸時代に青森県から伝播してきたネブタ文化を北海道の人々は七夕祭りと合わせる形で受容したことでローソクもらいが成立したことが明らかになった．函館市では，貰うものがローソクからお菓子へと変化したが今日まで続く年中行事として残っていることが分かった．

Ⅵ－1　文献資料や聞き取り調査に見られるローソクもらいの変遷

ローソクもらいが江戸時代後期から今日までどのような変遷をたどってきたかについて，北海道新聞の記事や住民への聞き取り調査の内容を踏まえ記述する．

今日函館市内で行われているローソクもらいは，江戸時代後期から伝わるネブタの風習と七夕祭りを混合させ，ひとつの年中行事として確立していった．　江戸時代にはネブタを師匠，弟子（子ども達）が曳いて市内を廻る際に，ネブタの照明として用いるローソクを各家々からもらっていた様子が「松前紀行」に記されている．大正時代になるとネブタを曳いて歩く姿は少なくなり，ローソクをもらい歩く習わしのみが残っていくことになる．子ども達が提灯をもって歩き，提灯の中に灯すローソクがなくなると家庭を訪問し，ローソクをもらい火をつないでいく形になったという．

戦後～昭和40年代になると，ローソクをどれだけたくさんもらうことができるかが子ども達にとって最大の関心事となり，ネブタを曳いて練り歩くという要素は消失した．もらえるものはローソクだけで，お菓子や金銭はもらってはいけないとされていたようである．この日のために各家庭で小さなローソクを用意して，回ってきた子供たち一人一人に与えていた．これは現在でも見ることができる光景である．男子は缶灯籠、女子は浴衣姿で提燈を手に持ち，歩き回っていた．また，もらってきたローソクは神棚や仏壇に供えていたことから，当時は日常的にローソクを消費する機会があったと考えられる．

昭和50年代になると，ローソクではなくお菓子をもらうことが多くなった．その理由として挙げられる要素が三点ある．①子ども達が火気を扱うことは危険であるため，ローソクを与えなくなったこと②ローソクが扱われなくなったことと相互作用的に，スーパーや商店で七夕用お菓子セットが売られるようになり，“七夕商戦”が展開されるようになったこと③ローソクが日常的に消費されなくなったことを挙げることができる．特に③の理由については，昭和35～40年代は各家庭には必ずと言っていいほど神棚や仏壇があり，そこにローソクをあげて火を灯し，毎日お参りする習慣があったためもらってきたローソクを使用する機会があった．しかし今日，核家族化や神棚・仏壇離れが進んだことでローソクの需要が減少し，それに合わせて子ども達にあげることも少なくなっていったと考えられる．

1990年代～現在になると，お菓子をもらうことが定着してくると同時に子ども達のマナーの悪さが目立ち始め，ローソクもらいが“お菓子もらい化”しつつあった．北海道新聞（2006）には商店街や小学校，幼稚園などでは元来の風情ある姿を取り戻そうと，マナーの徹底を呼びかけ，笹飾りが出されている家だけを訪問するルール作り，提灯・手作りカンテラの復活などの取り組みを始めた様子が記載されている．また，函館市教育委員会生活指導部会では年5回ある定例会のなかで，七夕の季節が近づくと笹飾りルールや挨拶の徹底などについての確認事項が話し合われ，市内小学校46校で対応するようにしている．千代田小学校では児童に対して笹飾りルールの厳守や金銭はもらわないこと，交通事故に気を付けることなどの指導が，七夕前日のホームルームでおこなわれている．また，囃し唄を歌い挨拶をするなどの礼儀の指導も行われている．このようにローソクもらいは当初，ネブタ祭りとして行われてきたものがローソクをもらう要素が残され，それぞれの時代背景や当時の子ども達の様子に即して変容してきたことでローソクもらいは現在でも市民権を得ることができた．さらにこの行事は近年，小学校や地域による指導で維持されてきたといえる．

Ⅵ－2　ローソクもらいに対する市民の意識

函館市民は「ローソクもらいがビニール袋を下げてお菓子をもらい歩く日となってしまって情緒を感じられず，寂しい気持ちになる」「お菓子をもらうだけのものもらいのようだ」など，お菓子をもらうだけでは競争をするようで，ローソクもらい本来の浴衣を着て提灯や缶灯籠を手に持ちローソクをもらい歩く姿や行事の意味が薄れていってしまうのではと憂う声が多数あった．しかし一方で，「子どもが少なくなってきているので大切にしたい」「お礼の挨拶をきちんとしていて皆丁寧であるから，訪問してきてくれたらお菓子をあげている」「子ども達が火を扱うことがなくなったので安全上は良いことだと思う 」とする肯定的な意見も存在した．市民からは，かつてのローソクをもらい歩く風情ある姿を維持継承していくべきと考える意見がいる

一方で，少子化が進む中でその現状に即した形の変容を受け入れる考えもあることがわかった．時代に合わせて習俗の形が変容していくことは自然な流れであるが，ローソクもらいが後世にも伝えられていくためにはその本質であるローソクをもらい歩く姿を忘れずに，子ども達と住民，小学校が協力をして秩序ある行動や風情が残す姿を大切にしていく努力が必要となるだろう．

〇謝辞

今回の調査にあたり函館市教育委員会，函館市中央図書館，函館市町会連合会，元町町会役員のみなさま，東雲町会副町会長の岩崎氏と町会のみなさま，五稜郭町会長の広川和夫氏と町会のみなさま，函館市立千代田小学校の宗像英明教頭先生，6 年 1 組のみなさま，また聞き取り調査にご協力頂いたみなさまに心より感謝いたします．ありがとうございました．

〇引用文献

函館市(1974)『函館市史 史料編』
函館市(1998)『函館市史　銭亀沢編』
南北海道史研究会(1985)『函館・道南大事典』
小田嶋政子(1996)『北海道の年中行事』
元木省吾(1964)『今日は何の日　函館郷土暦物語』
畑野栄三(1999)「村松浜の七夕流しと武者人形と紙人形」『郷玩文化』135 号
『北海道新聞』1993-2011

「ローソクもらい」に関する実態調査アンケート

長野県　信州大学教育学部社会科学教育専攻
山崎福太郎

このアンケートは、函館市内で行われている子ども達の七夕行事「ローソクもらい」についての実態を把握するための研究の一環としておこなうものです。なお、このアンケート結果はすべて統計的に処理しますので、個人情報が外部に漏れることは一切ありません。お手数をお掛け致しますがご協力のほどよろしくお願いします。

Ⅰ．あなた自身についてお答えください

①性別　1．男　／　2．女

②年齢　a．19 歳以下　b．20～39 歳　c．40～59 歳　d．60～79 歳　e．80 歳以上

③函館市居住歴　1．祖父母の代以前から　2．親の代から（自分が生まれてから）　3．その他*

＊「3．その他」と答えた方は次から選んでください。

a．1年以下　b．2～4年　c．5～9年　d．10～19年　e．20～39年　f．40年以上

Ⅱ．「ローソクもらい」についてお答えください

①現在、ご家庭で七夕行事「ローソクもらい」を行っていますか。

1．はい　／　2．いいえ

「1．はい」と答えた方は質問aに進んでください

「2．いいえ」と答えた方にお聞きします。

現在は行っていないが、以前行っていたことがありますか。

3．はい　／　4．いいえ

「3．はい」と答えた方は、その当時の様子をお答えください。**質問aに進んでください。**

「4．いいえ」と答えた方はなぜ行っていないのですか。次から選んでください。（複数回答可）

1．家庭に子どもがいない　2．近所付き合いが薄い　3．子どもの安全・防犯に配慮した
4．近所で行われていない　5．「ローソクもらい」を知らない　6．分からない　7．その他

質問a．「ローソクもらい」は一年の中でどの日程で行いますか。一つ選んでください。

1．7月7日　2．8月7日　3．その他（　　）

質問b．「ローソクもらい」を主に行うのは何歳ですか。次から選んでください。（複数回答可）

1．3歳以下　2．4～5歳　3．6～8歳　4．9～10歳　5．11～12歳
6．13歳以上

質問c．「ローソクもらい」は当日何時ごろに行いますか。該当する時間帯を選んでください。（複数回答可）

1．15時以前　2．15時～16時　3．16時～17時　4．17時～18時
5．18時～19時　6．19時～20時　7．20時以降

質問d．質問cの行う時間帯の設定は学校からの指導によるものですか。

1．はい　／　2．いいえ

②「ローソクもらい」を行うときに集まる仲間はどのような関係ですか。次から選んでください。（複数回答可）

1．学校の友人　2．兄弟姉妹　3．親戚（いとこなど）　4．その他（　　）

③「ローソクもらい」を行う際に手に持つものを次から選んでください。（複数回答可）

1．缶灯籠　2．提灯　3．懐中電灯　4．袋　5．その他（　　）

④「ローソクもらい」を行う際の服装を次から一つ選んでください。

1．浴衣　2．洋服（Tシャツなど）　3．その他（　　）

裏面へつづく

|先からもらう物は何ですか。次から選んでください。（複数回答可）

1．お菓子（ジュース等含む）　2．ローソク　3．おこづかい　4．その他（　　）

|先には訪問してもよいことを示す目印となるものがありますか。「はい」と答えた方はその目印となってのをお書きください。また、目印が出ている家に訪問することは学校の指導によるものですか。

1．はい　／　2．いいえ　　目印となるもの［　　］
3．学校の指導による／4．学校の指導ではない*

学校の指導ではない」と答えた方はその理由をお書きください。

）

ーソクもらい」で訪問する範囲はどこまでですか。次から一つ選んでください。

1．自宅周辺のみ　2．町会域内　3．町会域外　4．その他（　　）

ーソクもらい」を行う歳の囃し唄を次から一つ選んでください。該当するものが無い時は記入してください。

竹に短冊　七夕祭り　大いに祝おう（オーイニイワオウ）　ローソクー本頂戴なー」
竹に短冊　七夕祭り　多いは嫌よ（オーイヤイヤヨ）　ローソクー本頂戴なー」
竹に短冊　七夕祭り　多いは嫌よ（オーイヤイヤヨ）　ローソクー本頂戴なー　ローソクけなきゃ　かっちゃぞー」
ローソク出―せー出―せーよー　出ーさーなーいーとーひっかくぞー　おーまーけーにーかっちゃくぞー」
し唄は歌わない
の他（　　）

ーソクもらい」の行事に保護者は同伴しますか。

1．はい　／　2．いいえ

～以下はご存知の方に回答して頂ければ幸いです～

この「ローソクもらい」と昔の「ローソクもらい」には差異はありますか。

1．はい　／　2．いいえ

い」と答えた方にお聞きします。行事内のどこに違いが生じていますか。次から選んでください。（複数回答可）

a．もらうもの　b．時期　c．服装　d．時間帯　e．囃し唄　f．持ち物　g．その他（　　）

でいずれか一つに○をつけた方は選択した内容についてどのように違っているのかを具体的に記入してください。可能であれば何年前と比較しているのかも記入してください。

本日アンケート内容についておうかがいさせて頂いても差し支えのないという方がいらっしゃいましたら電話やメールアドレス等をご記入いただけると幸いです。

以上でアンケートは終了です。ご協力ありがとうございました。